



# 「見え方」について part. 2



稲田の黄金色に彼岸花の朱の縁取りが眩しい 平成 27 年 9 月 17 日 (木) に第 207 回支援研究会が開催されました。今回のテーマは“見え方”について part.2”です。7 月にも同様のテーマで開催致しましたが、悪天候と重なったため、今回は第 2 弾として再度模擬体験も交えながら、様々な見え方や見えにくい方々への支援についてお話し頂きました。

最初は、医療法人むらかみ眼科医院 副院長・眼科専門医 村上 美紀さんです。前回と同じく弱視、視野狭窄の模擬体験を盛り込んで、医師の立場から“見える”ってなんだろう?、“見える力 (視機能)”って なに?”と題して、お話し頂きました。眼科医からのお願いとして

- ・障害者は自分からの適切な訴えがない。
  - ・眼科受診経験がなければ、一度は受診を。
  - ・眼科では視力検査できなくても、眼鏡が必要かどうかはわかる。
  - ・眼にあった眼鏡をかけることは大切。
  - ・眼鏡の度数も数年ごとに変わる→確認が必要
- (村上先生の資料より抜粋)



以上の 5 つをあげられました。障害のあるご本人が自分の見え方を自覚するのは難しく、支援する側も“視力検査ができないから、眼科を受診しても…”と受診を躊躇うのではなく、“視力検査をしなくても眼鏡が必要かどうかは判断出来る”ので、眼科を受診して欲しい”とのことです。

続いて福祉用具プラザ北九州 視覚障害生活訓練等指導者 (歩行訓練士) 武田 貴子さんです。

まずはアイマスクで視覚を制限して物を食べる模擬体験をして頂きました。皆さん、視覚以外の“嗅覚・味覚・触覚・聴覚”をフル回転させていた様子で、ほとんどの方が配られた食べ物が“飴”だとわかったようですが、味までわかった方は少なく「食べる前に“食べ物の名前・色・形・何味”等の情報提供があった方がおいしく食べられたのではないかな」等の意見が出されました。

飴の味は 6 種類あったのですが、他に情報提供がなく 1 種類だけ渡されたら、その飴を選択するしかありません。一番大切なことは“自己選択・自己決定”“自立支援”で、そのためには“情報提供をしっかりとこなうこと”。周囲の状況や情報等を提供して、その情報の中から視覚障害者が選んで決定出来るようにすることが大切とのことです。

支援者は障害のある人に対して出来ることにも支援し過ぎてしまうこともあると思うのですが、まず“出来ない!と決めつけないことが大切”で、その方が出来ることはやってもらう。出来そうなことを提供することが自立支援につながるということです。

また、会場から中途障害者に対する、会社での環境調整や精神的ケアについて質問がありました。過剰な支援になったり、本当に困った時に手伝わってもらえないこともあるので、どのくらい見えていて見えていないかを周りにうまく伝えることと、不安をなるべく前向きな方向に対処できるかがポイントであるとのことでした。

人は眼から 70%~80%の情報を得ていると言われてるので、視覚障害者は 20%~30%の情報で生活しているのか、というそうではなく、見えないことの不自由さはあるけれど、その他の感覚で情報を集め、工夫次第で今までと同じ生活ができるとのことで、視覚に障害のない我々が如何に目に頼って生活しているかがわかるとのことでした。

前回の内容をより深め、新たなお話しも聴けた今回の支援研究会。Part1、Part2 両方にご参加頂いた方には、実り大きく“目から鱗”的な研究会であったのではないかと思います。

本日の参加者は 32 名。新規の方は 6 名でした。ありがとうございました。

第 205 回支援研究会「見え方」について (Part 1) の議事録もご覧頂けます!是非見てね♪



※こちらの議事録は  
北九州市障害者自立支援協議会の  
ホームページでもご覧いただけます。  
<http://kitakyushu-net.shien-c.com/>

